

令和五年 五月二十八日  
青鳳会講師 吉野 久

● 腫物、湿疹をどう捉えるか

「腫」「疔」「瘤」「瘰」「癰」「癩」「腫」「疹」「疔」「瘍」

右に掲げた字は、いずれも「はれもの」の意を持つ字だが、最初に説明したように、アトピー性皮膚炎は湿疹であり、原義は「奇妙な皮膚湿疹」というほどのことになるので、「疹」字で表されるものが近いと思われる。

疹 <sup>あわぶ</sup>赤い粟粒ほどの発疹ができる病気。あるいは麻疹<sup>ましん</sup>(はしか)のこと。

他方、<sup>じんましん</sup>「蕁麻疹」という言葉もあるが、これは発疹がハナスゲの花のように、大量にできることから付けられた名だと考えられる。

蕁 タム、ジム ハナスゲ、(動詞)火が勢いよく燃え上がる

蕁麻 ジムマ イラクサ科の多年草

素問・四時刺逆從論篇第六十四

日出方得人之所病與狐同故曰狐疝 少陰有餘病皮痺隱軫不  
足病肺痺 腎水逆連於肺母故也足少陰脈從腎上貫肝 滑則病肺

少陰 <sup>あまり</sup>餘有れば、<sup>ひひ</sup>皮痺、<sup>いんしん</sup>隱軫疹の仮借※を病む。

※隱 多くて盛んなさま 隱脈

軫：荷車の積載部の底に張った横木。あるいは車体の基部。(形)多く盛んなさま  
股軫：人数が多い。ここで使われている「軫」は「疹」字がまだ無かったため、仮借して用いられたもの。

ここでは少陰の有餘とされているが、愚考によれば、アトピー性湿疹の実態は、内の

冷えによる、外熱の有餘だと思われる。が、これはさて置いて諸書の考察を見てみよう。

森立之案文(「素問攷注」):少陰腎水有餘、則肺金皮部津液充足。故發爲隱軫。是子之剋母之理。「皮痺」者皮表衛陽有濕邪、而閉塞其氣之證也。其爲證或作隱軫。

少陰腎水に有餘あれば、則ち肺金皮部に津液充足す。故に發して隱軫を爲す。是れ子の母を剋す理なり※1。「皮痺」とは皮表の衛陽に濕邪有れども、其の氣閉塞せる證なり。其れ證を爲せば或ひはかさねて※2)隱軫を作す。

※1 相乘關係(相生の逆) この場合、水剋金・・・素問・陰陽別論7に詳しい

※2 或 そのうえに、さらに

この場合「皮痺を患つた上に、さらに隱軫ができる」

既立之監、或佐之史 既に之が監を立て、或ひは之が史を佐(たす)く

監督官を立てた上に、さらに御史を補佐した ^詩・小・賓之初筵v

「外臺秘要」十五 癩軫風軫門云「黃帝素問曰、風邪客於肌中、肌虛眞氣致散。又被寒搏皮膚、外發腠理、淫氣行之則痒也。所以癩軫瘡疾、皆由於此。有赤軫、忽起如蚊蚋啄、煩痒、重沓壘起。搔之逐手起也。刪繁同」↓寒冷アレルギー

「外臺秘要」十五 癩軫風軫(インシフウシツ)門に云ふ「黃帝素問に曰

く、風邪、肌中に客すれば、肌虚し、眞氣は致散す(まったく散じはててしま

う※1)。又た寒を被り、皮膚を搏てば、外のかた腠理を發し、淫氣行りて

則ち痒きなり。癩軫瘡疾(サウシツ)する所以は、皆な此に由る。赤軫有り

て、忽ち蚊蚋(蚊、蚋ともに虫のカ)の啄む如き起これば、煩はしき痒み、重沓(重なりあう)して壘起す。之を搔けば逐には手づから起す(自分で治す※2)

也。繁同を刪す(同じ内容のことは削つて書かない)」

※1 致 到達する、きわめる

※2 起 なおす、なおる

「醫心方」卷三十八「素問云、赤疹忽起如蚊蚋、煩癢、重沓壘起。搔之逐手起也。有白疹、亦如此」↓寒冷アレルギー

「病源候論」卷二風癩隱疹生瘡候云「人皮膚虛、爲風邪所折、則起隱疹。寒多則色赤、風多則色白、甚者痒痛、搔之則成瘡」↓寒冷アレルギー

右に見るように湯液治療書には、寒冷アレルギーによる蕁麻疹の記述はあるが、アトピー性湿疹についての記述はない。また素問にあるように、少陰腎水が有余して肺母を傷る結果、皮膚病となるという記述も、どうも腑に落ちないのである。

## ● 鑿鍼さんしんについて

アトピー性皮膚炎の治療に鑿鍼を用いることを提唱したのは、当会の母体となった伯風会を主催しておられた伊藤瑞風先生である。伊藤先生は鑿鍼をカツサ(刮痧)のように使って、皮下毛細血管のうつ血を改善させておられた。その古典医書上の論拠は、「靈樞」の「官鍼第七」にあった。

ちなみに「鑿」とは、農具の鋤すきや工具の鑿のみことで、鑿鍼の形が鋤に似ていることから付けられた名称である。

3

鑿 サム 治療用のほり。農具のすき。工具ののみ。

## 靈樞・官鍼第七

病在皮膚無常處者取以鑿針于病所膚白勿取

やまひ 病、皮膚に在りて、ジヤウシヨ 常處すること無き者は、もの 鑿鍼を以つて病所にザンシ 取る。はた 膚白ければ取ること勿れ。なか

「皮膚の病で、あちこちに移動するものは、鑿鍼で瀉血せよ。ただし皮膚が白い場合は瀉血してはならない」という内容である。

では、その鑿鍼がどのように説明されているか、靈樞・九鍼十二原第一を見てみたい。

## 靈樞・九鍼十二原第一

横居視之獨澄切之獨堅九針之名各不同形一曰  
鑿針長一寸六分二曰真針長一寸六分三曰鑿針

九鍼の名、<sup>おのおの</sup>各々形を同じうせず。一を鑿鍼と<sup>い</sup>ひ、長さ一寸六分なり。

三六

戦国から秦にかけての1尺は23cm前後であった。漢代でもあまり変わらず、23.24cm程度であった。

←一寸六分 = 3.57cm 神戸源藏作…6cm

「中国まるごと百科事典」<https://www.allchinainfo.com/outline/中国の度量衡/>  
1引=10丈、1丈=10尺、1尺=10寸、1寸=10分 1尺=23.1cm

注目すべきは鑿鍼が第一鍼で、毫鍼ではない点である。「余、毒薬を被らざらしめ、砭石を用いざることを欲す。微鍼を以て、其の経脈を通じ、其の血氣を調べ、其の逆順、出入りの會を營さむことを欲す」と「九鍼十二原」の冒頭で黄帝が述べている主旨を述べているのである。これは何故なのか。

そこで、素問・鍼解篇を見てみたい。この篇は「九鍼十二原」の解説として書かれた篇である。

夫天三地三人四時五音六律七星八風九野身形  
 亦應之鍼各有所宜故曰九鍼新校正云詳此文與靈樞經相出入人皮應天  
覆養於物人肉應地柔厚安靜人脈應人盛衰亦易人筋應時堅  
天之象也地之象也人之象也天之象也  
真定時人聲應音音故人陰陽合氣應律交會氣通相生无替則  
之象也音故律之象新校正云按  
別本氣人齒面目應星八面應七星者所謂面有七孔應之也人出  
一作度新校正云詳此注乃全元起之辭也  
人氣應風動出往來人九竅三百六十五絡應野野身死之外故  
風之象也野之象也  
內經十四 王仁  
一鍼皮二鍼肉三鍼脈四鍼筋五鍼骨六鍼調陰陽  
七鍼益精八鍼除風九鍼通九竅除三百六十五節  
氣此之謂各有所主也一鏡鍼二百鍼三銀鍼四鋒鍼五針鍼六負利  
七毫鍼八長鍼九大鍼 新校正云按別本

夫れ一は天なりて二は地なり、三は人なりて四は時なり、五は音  
 なりて六は律なり、七は星なりて八は風、九は野なり、身形も  
 亦た之に應ず。鍼も各々宜しき所有るが故に九鍼と曰ふ。

人皮（人の皮）は天に應じ※1人肉は地に應ず、人脈は人に應じ人  
 筋は時に應ず、人聲は音に應じ人の陰陽の合氣※2は律に應ず、  
 人齒面目は星に應じ人を出入する氣は風に應じ人の九竅三百  
 六十五絡は野に應ずる也。

故に一鍼は皮、二鍼は肉なり、三鍼は脈、四鍼は筋なり、五鍼  
 は骨、六鍼は陰陽を調ふるなり、七鍼は精を益し、八鍼は風を

除き、九鍼は九竅キフキヤウを通じ三百六十五節の氣を除くなり。此これを  
各々おのおのつかさど主イウる所を有すと謂ふ也。

※1人皮應天 王冰「もの覆蓋やぐがい於物、天かたちなり之象也」物を覆蓋するは、天の象也。

世界にある物を覆うのは、天のかたちであり、道理である。

象：動物のゾウ、かたち、のり、道理（動詞）かたどる

※2人陰陽合氣 合：うちとける、結びつく ↓「人の陰陽を通じ合う氣」というほどの意。

ここに述べられているのは、一から九までの数に事象を当てはめた世界観で、恐らく素問と靈樞独自のものである（同趣の文は、靈樞・九鍼論第七十八にもある）。

鑱鍼を九鍼の第一とした理由も、このような世界観にあることが分る。数においての「一」は世界においての「天」であり、人体上では皮膚である。その「皮膚」を治療する鍼が「鑱鍼」だから、第一鍼だという理論である。さらに考えれば、ここで考えられている鑱鍼の用法は瀉血をするためだが、アトピー性皮膚炎においてはカッサ様に、皮膚をこすって皮下の毛細血管の鬱血を除こうとする用法である。

これは言ってみれば机上の空論、形而上の議論で、実際の治療とは程遠いものではないか、という反論は当然予想される。だが、実際の臨床とはどうした訳か、このような形而上の議論をも受け容れるものなのである。実際の臨床は理屈通りには行かないということか、あるいは単なる偶然の一致なのかもしれないが。

なお、先に言ったように九鍼については「靈樞」巻頭の「九鍼十二原第一」に述べられているが、この篇を補足説明するために、「靈樞」には「小鍼解第三」が書かれ、素問には「鍼解篇第五十四」が書かれた。さらに「九鍼十二原」を発展させようと、「靈樞」では「官鍼」「九鍼論」の二篇、「素問」では「寶命全形論」「八正神明論」「離合眞邪論」の三篇が書かれた。「九鍼十二原」が、当時いかに大きなインパクトをもって読まれたかの証左と言えるだろう。

## ● 皮脂について

治療が進み皮膚状態が改善されてくるに従って、皮脂を分泌させる力が回復されてくるのが分る。「素問」でも、皮脂の重要性が説かれている。

靈樞・歲露論第七十九

氣月滿則海水西盛人血既積肌肉充皮膚緻毛髮堅  
 腠理郄煙垢著富是之時雖遇賊風其入淺不深至

月、満ちれば、則ち海水、西に盛んなりて、人の血氣、積み、肌  
 肉充ち、皮膚緻く、毛髮堅く、腠理の郄に煙垢著く。是の時  
 に當れば、賊風に遇ふと雖も、其の入ること浅く、深からず。

煙垢 煙…すす 「煙垢」とは、この場合顔の皮脂に埃の混じった垢のことで、顔の表皮を守るものとして重視されている。

素問・上古天真論第一

ここに書かれているのは年齢とともに皮脂の分泌が衰えてゆく様である。

體盛壯女子天癸之數七七而終年居四七 五七陽明脉衰面始  
 焦髮始墮陽明之脉氣營於面故其衰也髮墮面焦靈樞經曰足陽明之  
 脉起於鼻交頰中下循鼻外入上齒中還出俠口環唇下交承

五七、陽明脈衰へ、面焦き始め、髮墮ち始む。

隨齒槁腎主於骨齒為骨之餘氣既衰 六陽氣衰竭於上面焦  
 髮鬢須白陽氣亦陽明之氣也靈樞經曰足陽明之脉起於鼻交頰中下  
 循鼻外入上齒中還出俠口環唇下交承

ろくはち 陽氣、上に衰へ竭つき、面焦おもてかわき髪鬢ハツヒン、頰まりて白し。

※焦くちびるかわかくちかわわく 唇焦よき口燥えきて呼よべども得えず

唇が乾き口がからからになるほど叫んでも悪童たちがつかまらない(杜甫詩・茅屋  
為秋風所破歌)

髪かみかみ ハツ 頭の毛、かみ

鬢ヒン ほん ほおひげの上から髪に連なるもの

頰ハン はん (動)わける、(形)まだらの

## ● 排毒

患者の体質改善、表皮の維持とともに、体内に蓄積された異物や毒素を排出させるということも治療家は考えるべきである。長野式治療法で知られる長野潔先生(故人)は、排毒作用のある穴として築賓と肩髃を挙げている。

・肩髃ひきゅうせんきんようほう・・・「備急千金要法」に「灸癰法」として肩鎖関節陥凹部の「肩頭」(奇穴)という穴を挙げている。また伊藤瑞鳳先生も肩髃穴をアトピー性皮膚炎の治療穴に挙げておられる。

・築賓けだいひょう・・・「外台秘要」(唐・王焘、752年成立)には「少陽維穴」という名で、太谿と復溜の中間の穴を脚氣の治療穴として挙げている。これは、当時、脚氣がビタミンB1の不足を原因として起るということが分つておらず、何らかの中毒、あるいは感染症であるとの考えを根拠に掲げられた説だが、そういう意味では長野先生の築賓穴とともに一考に値するのではないだろうか。

## ● 鍼灸による治療

ここまで述べてきたことを更めてまとめると、次のようになる。

1. 患者の基本的な体調の改善
2. 皮下毛細血管の鬱血改善
3. 排毒



1. について、先に私は、アトピー性湿疹の原因は、内が冷えることによる、外熱の有餘ではないかと言ったが、実際に临床上は内(裏)を温める治療を中心に行なっている。内を温めると、外皮に浮いてきた熱は内に引きもどされ、外ばかり熱を持つ皮膚が荒れ、湿疹を作る、ということがなくなる。

また内(裏)が冷える患者は冷え性であると同時に、交感神経の興奮が強い場合が多い。脈状としては、沈・細の祖脈を呈する場合が多いが、照海と列脈を取ると改善される。

また、三年前に「花粉症の治療」として述べたことでもあるが、アレルギー体質の患者は脾の証、あるいは肝の証として治療すると奏効する。これに鍼鍼を使って皮下毛細血管の鬱血を改善する治療を加えると、時間はかかるが確実に治癒にいたる道を開くことができる。

**(臨床例)** 45歳男性 令和4年3月から、アトピー性皮膚炎の治療開始。少時よりアトピー性皮膚炎に悩まされ、様々な治療をするも無効、両親が心配し続けてきた。

1年経過して、肌荒れがなくなり、仕事の多忙な時期でも全く問題なし。皮脂の分泌が確認できるようになった。全身の色素沈着が残るが、現在14か月経過して、下腿、脛の色素沈着が薄れてきた。

● 辞書からの引用は『全訳漢辞海』に拠った。